気まぐれなウォーカー

都恵司

気まぐれなウォーカー

　この家族はおかしい。
　どうして私の名前が「ひつじ」なんだ。私は猫なのだぞ。
「めぇー！」と鳴いた私も私だが、めぇーと鳴くのは山羊じゃないか。なのにどうしてひつじなんだ。

　ひつじは白いふわふわ毛を持つ雌猫である。ものごころがついた頃にはすでに秋野ひつじという名前でここにいた。だから、名前を決められたときの事は覚えていない。理乃から、幾度となくひつじは「めぇー」って鳴いたからひつじって名前にしたんだよと聞かされた。しかし、本当に自分が「めぇー」なんて鳴いたのか。ひつじは疑問に思う。今のひつじは「みゃー」としか鳴くことができないからだ。
　ひつじの一日は毛づくろいから始まる。軟らかい体を駆使して体の隅々まで掃除をする。それから朝飯前のパトロールである。勝手口の網戸は切り取られ、ひつじが出入りできるスペースが作られている。理乃の提案によるものだった。母の倫は網戸を破るのに抵抗があったが、ひつじを家の中にずっと閉じ込めておくのは可哀想だという理乃の言葉に押し切られる形で網戸に穴をあけ、出入り自由になるように小さな暖簾をかけた。
　パトロールは毎日同じ場所を歩く。新参猫がひつじのシマを荒らしていないかどうか念入りに臭いを嗅いでチェックする。それと他の家猫や野良猫に挨拶をするのも忘れない。パトロールが終わると、朝食である。朝は皆ばたばたしているが、理乃だけは余裕がある。ひつじが家に帰るころには新しい水と朝ごはんが理乃によって用意されている。テレビのCMなどではがつがつ食べている猫の姿がよく映っているが、ひつじはそんなはしたない食べ方はしなかった。キャットフード一粒一粒味わって食べる。おいしい？　と理乃が尋ねるので喉をぐるぐる鳴らして応える。
　朝食を食べ終えると、しっぽ追いかけて遊んだり、バッタやカエル、 Gやクモなどを捕まえて遊んだり、昼寝をしたり、昼寝をしたり、昼寝をしたりしている。それから昼食を食べてまた同じように時間を過ごす。
　ひつじが夕食を食べ終えて、リビングのテレビの上でごろごろしていると、父と母の言い争う声が聞こえてきた。夫婦喧嘩は犬も食わないという。猫もそうだろうか。ひつじは違った。気分にもよるが、止めようとするときは止めようとした。
「大体ねぇ！　あなたがこんなもの、子どもたちが見られる場所においてあるっていうことが信じられないの！　馬鹿じゃないの。盛りのついた高校生じゃあるまいし。こういうのって」
「き、君だって僕に何の相談もなく三万円のかばんを買っていたじゃないか。三万円だぞ。三万円！　僕のひと月のお小遣いと同じ金額だ！！」
「それは今関係ない話でしょう！　今はあなたの話をしているの！」
「関係なくなんかない。少なくとも、僕が稼いだお金だ」
「あなた一人で稼いだお金じゃないわ」
「僕の給料から買ったんだ」

　ぎゃあぎゃあ言いあっている。だんだん論理的ではなくなり、罵り合いになる。普段の不満が爆発する。ひつじは、思い切り鳴いてみるが、頭に血の昇った二人には届いていないようだった。むぅぅ。このままではいけない。さらに思い切り息を吸い込み、ひつじは盛大に舌を噛んだ。みゃー！　と鳴くつもりが、
　めぇー！
　その瞬間、ぎゃんぎゃん言いあっていた利雄と倫が目を丸くしてこちらを見た。二人ともさっきまでの険しい顔が嘘のように消えて笑顔になる。
　しかし、ひつじは気まぐれなウォーカーである。二人を止めるために近づいていたからパソコンのキーボードの上を歩くのも仕方がない。タイミングは最悪だった。利雄は消したと言って画面を見せたが、そこには隠しファイルがあった。ひつじがキーボードの上を適当に歩いたため、奇跡的に隠しファイルが開いてしまった。艶めかしい声がリビングに空しく響く。ひつじはそのあとの事は知らない。さきほど以上に恐ろしい叫び声が聞こえてきたような気がしたが、そのときにはもう勝手口から外へ出て屋根の上に寝転んでいた。そして、おぼろげながらも思い出したのだ。ひつじの名前を決めるときも父と母は喧嘩をしていた。今日ほどひどいものではなかったが、理乃が怯えるには十分な言い合いだった。ひつじを抱いている理乃の腕が小刻みに震えていて、ひつじは子猫ながらになんとかしなければと思ったのだ。

　理乃と静香は帰り道が同じ方向だった。とはいっても理乃はすぐに家に着いてしまうため、家と学校の間にある公園に寄り道していつもすこし話している。今日は静香がペットを飼うことを考えているのでその話をしていた。
「変なの。めぇーって鳴くのは羊じゃなく山羊だよ。りのちゃん家って変わってるねえ」
「でも、めぇーって鳴いたのはその時だけだったよ。今はみゃーとしか鳴かないの。それで、静香は何を飼うの」
「まだ、決めてないんだけど、やっぱり犬か猫がいいねーってお母さんと相談してるの。でも、お父さんはトカゲが大好きだから、もしかしたら、トカゲ？」
「ええー。可愛くないよそれ」
「そんなことないよ。良く見るとトカゲも可愛いんだよ」
「……お父さんに図鑑を見せられたでしょ」
「うん？　なんで知ってるの」
　理乃は静香の家の力関係を察した。静香は一人っ子である。おそらく、静香の意見が最大限に尊重されるのであろう。そのために、静香父は図鑑の中でも可愛らしいトカゲが載っているページを静香に見せて根回しをしているのだろう。
「なんとなく。犬と猫ならどっちが良いの」
「うーん。りのちゃんの話を聞いてると、すっごく猫も可愛いと思うんだけど。私散歩に行きたいから、犬かな」
「うん。ひつじは一人で散歩に行くもの。私と一緒に出かけたりはないなぁ。そうだ！　もし、静香が犬を飼うんだった私も一緒に散歩に行っていい？」
「もちろんだよ。一緒に行こ」
「でもやっぱり私は猫を勧めるね。良かったら、なでに来ない？」
「いいの？　行く！」
　静香がトカゲを飼うことになったらちょっと困るので理乃は猫の可愛らしさを伝えようと画策した。

　理乃が静香を連れて帰宅したとき、ひつじはリビングの机の下でごろごろしていた。理乃の姿を見つけると、愛想よくしっぽをふるふると動かしながら机の下から出てきた。
「ただいま、ひつじ。いい子にしてた？」
「みゃー」
「すごい。ひつじちゃんと会話してるみたい。超かわいい」
　計画通り。理乃は静香から見えない方を向いて黒い笑顔を浮かべた。ひつじはその笑顔を見ていた。
「なでていい？　ねえなでていい？」
　ひつじは自分から静香に近寄っていく。家族の中でひつじを一番大切にしているのが理乃だった。その友人が来ているのだ。丁重にもてなさなければならないことをひつじは把握していた。

「やーん。かあいい。ふわふわ。もふもふ」
　静香はひつじの首からお腹、背中を撫でまわした。撫でている方も撫でられている方も至極幸せそうな表情をしている。うんうんと理乃はうなずく。これでいい。これで静香はトカゲよりは猫を選んでくれるだろう。
　一通り静香が撫で終えると、洗面所で手を洗ってから理乃はお茶をだした。おやつを食べながらまたどんなペットを飼いたいか二人で話し始めた。
　つまらないのは、ひつじである。疎外感。ていうか私がいるのになんで理乃までキリンが飼いたいとか話してるんだ。
　こうなったら。私にも手があるんだから。
　そう、昨日ひつじは覚えたのだ。あの鳴き方を。
　めぇー！　と鳴いた。

「本当に鳴くんだ……」
「だから、言ったでしょ。めぇーって鳴くからひつじだって」

気まぐれなウォーカー

http://p.booklog.jp/book/33062

著者 : 都 恵司
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/123miki/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/33062

ブクログのパブー本棚へ入れる
http://booklog.jp/puboo/book/33062

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社paperboy&co.